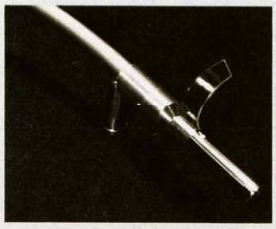
ANNIVERSARY 50 YEARS SINCE 1938

ヘルベルト・フォン・カラヤンは、おそらくレコード音楽の未来を正確に予見

1938年、彼が初レコーディングに選んだのは、モーツァルト《魔笛》序曲。思えば、なんとふさわ



振動体は軽くなければ真のハイファイは実現できない ——スタックスのこのフィロソフィーはモノーラル・ピックアップカートリッジCP-20A(昭和27年発売)でも既に商品化されていた。その必要とする針圧は1g。当時、一般のカートリッジは5g以上を必要としていた時代である。

SR-Σ(シグマ) Professional

Panoramic Sound
Electrostatic Earspeaker
¥46,000

1960年に発売されたイヤースピーカーの原器SR-1以来、スタックスのイヤースピーカーは一貫して静電気の力によるプッシュプル・ドライブ方式を採ってきている。(くわしくは後記「1ミクロンの誘惑」参照)それは磁気歪を避けたかった為でもあるが、振動体を極めて軽く出来るからでもある。初め6ミクロン(6/1000ミリ)でスタートした振動膜も遂に1ミクロンに、また振動膜の両側に並行に置かれた固定極間のギャップも初めの0.6ミリから1ミリへと拡大され、大振幅時の歪を低減し、PC-OCCケーブルの採用と相まって極限に近い音質を獲得した。しかしSR-Σシリーズの大きな特長は他にもある。それは耳たぶを覆う大型の発音体(エレメント)とそれを耳の前方に置いた特異な音響構造によって造り出される自然な音場空間である。あなたが、じっくりと音楽にひたりたいとお思いならSR-Σ Professionalをおいて他に満足のいくヘッドフォンは存在しないかもしれない。

●SR-Σ Professionalの発音ユニット

SR-Λ Signature

Semi-Panoramic Sound
Electrostatic Earspeaker
¥41,500

音そのものの美しさを評価したい—などと言えばやや大げさに聞こえるかもしれないが、SR-Λ Signatureはそんな目的の為に生まれたイヤースピーカーと言ったらぴったりかもしれない。マイクロフォンの拾った音を一つ残らず再生したいという願望を最も安価に現実のものにしてくれたSR-Λシリーズの最新モデルがこのSignatureである。SR-Σ Professionalと同じく1ミクロンの振動膜と1ミリの固定極間ギャップ、PC-OCC導体のケーブルなど音を良くする技術を総て盛り込んで完成されている。SR-ΛシリーズはSR-Σの持つ音場再現能力と、名作とまで言われたSR-Xシリーズの持つ高解像力を合わせ持ったイヤースピーカーをという希望から生まれたハイブリッド製品ではあるが、その完成度の高さから、今ではSR-Λシリーズ以外は聴かない—という方も多い。そのSR-Λをドイツ・ダイムラーベンツ社の依頼により低音・大振幅時にも低歪率に、という目的にあわせて改良が加えられたのが有名なSR-Λ Professionalであり、更にSR-Σ Professionalの開発で得られた技術とノウハウを盛り込んで一段と磨きがかけられたのがSR-Λ Signatureというわけである。

●ダイムラーベンツ音響研究室